國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學図書館蔵賀茂真淵自筆本『勢語七考』について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笹川, 勲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000654

國學院大學図書館蔵賀茂真淵自筆本『勢語七考』について

笹川　勲

はじめに

『勢語七考』は、賀茂真淵が著した『伊勢物語』についての概説である。この著作の伝本は従来、大田南畝が編んだ叢書である『三十幅（みそのや）』（国立国会図書館蔵）に収められるもの（以下、国会図書館本）と、竹柏園旧蔵のもの（題号は『妹背物語考』、以下竹柏園本）の二本が確認されていた。近年、國學院大學図書館に収められたもの（以下、國學院本）は第三の伝本ということになる。『勢語七考』は、真淵の『伊勢物語』註釈書である『伊勢物語古意』総論との先後関係が問題とされているが、『勢語七考』諸本の間でも成立時期や先後関係が論究されている。また、構成や本文も一様ではない。本稿では、真淵の『伊勢物語』研究における、國學院本の位置を考えてみたい。

一　國學院大學図書館蔵『勢語七考』書誌

まず、國學院本『勢語七考』の書誌を掲げる。該本の書誌については、國學院大學図書館のデジタルライブラリー解説および小論[1]にて述べたが、再掲する。また本稿末に、全文の翻字を掲げる。

『勢語七考』（貴四二四三）

外題　「伊勢物語通釋　真渕翁真筆」

内題　なし

縦　二八・四糎

横　六・二八米

書写年代　江戸時代中期

装幀　巻子装一軸（冊子本を改装した痕跡がある）

印記　田安府芸台印

補足事項としては、表紙は青地に金糸花菱繋文様の緞子。箱書には「縣居翁真渕書」とある。見出しの付けられていない前書きの他、「物語てふ事」、「いせ物かたりと名付たる事」、「伊勢の御のかきたるにあらざる説の事」、「業平の自記ならぬ事」、「時代のたかへる事」、「作れる時世の事」、「むかし男てふ事」の七項目から構成される。印記の「田安府芸台印」とは、徳川御三卿のひとつ、田安徳川家の蔵書印である。このことから國學院本が、かつては真淵の出仕していた田安徳川家の蔵書であったことがわかる。田安徳川家の蔵書は、昭和十三年（一九三八）以降、数度の売立が行われているが、大正元年（一九一二）における整理に際して調製された『御書物目録』には、國學院大學本の

『勢語七考』と思しき古典籍は記載がない[2]。ここから、國學院本の『勢語七考』は、少なくとも大正元年以前には、田安徳川家の蔵書から流出していたと思量される。成立年次を示すような識語、本奥書の類はないが、巻末に「賀茂真淵上」の一文があることは注目してよいだろう。この点については後に考察を加える。

二　『伊勢物語』研究史と真淵の伊勢物語研究

『伊勢物語』に限らず、前近代の古典文学研究は、多く本文の校訂、書写と註釈を二本の柱として営まれてきた。大津有一氏によれば、『伊勢物語』の註釈史は、一、髄脳の時代（平安末期～鎌倉時代初期）、二、古註の時代（鎌倉時代中期～室町時代初期）、三、旧註の時代（室町時代中期～江戸時代初期）、四、新註の時代（江戸時代中期～末期）に区分される。真淵が研究活動を行なったのは、このうち四の時代で、契沖の『勢語臆断』以降の「国学者と称せられた人々の勢語註釈が主流となつた[3]」時代である。

第一期の代表としては、『新古今和歌集』の撰者の一人であり、歌人として知られる藤原定家が挙げられる。定家は、作歌活動と平行して、『源氏物語』や『古今和歌集』、『土佐日記』、『更級日記』といった作品の書写や校勘といった活動も行ったが、『伊勢物語』についても多くの写本を残し、行間の勘物として、自らの見解を示している。

室町時代に入ると、一条兼良『伊勢物語愚見抄』、肖柏『伊勢物語肖聞抄』、清原宣賢『伊勢物語惟清抄』、細川幽斎『伊勢物語闕疑抄』といった註釈書が著される。また、定家の校訂、書写した『伊勢物語』の伝本のひとつである天福本は、三条西実隆筆の転写本が、連歌師を通じて流布し、以降、『伊勢物語』の主要な伝本としての位置を占めることになる。近世の『伊勢物語』研究は、上記のような中世における成果を受けたものである。

近世の『伊勢物語』研究には、中世以来の研究主体の流れから二つの系譜が存在する。一つは堂上における研究で、後陽成院から後水尾院を経て、霊元院に到る、禁裏や仙洞御所における伊勢物語講釈を中心とした研究活動である。研究の成果は、参加した皇族や公家衆の残した聞書として今に伝わっている。今ひとつは、連歌師による『伊勢物語』研究を受けたもので、北村季吟の『伊勢物語拾穂抄』や契沖『勢語臆断』が、江戸時代初期から前期の研究として著名である。

真淵と『伊勢物語』との関わりは、[4]享保十三年（一七二八）、真淵三十二歳の時、荷田春満に入門した後、本格化するが、それ以前においても、『伊勢物語』との接点があったことが窺われる。春満入門前の真淵は、浜松諏訪神社の神職杉浦国頭（くにあきら）とその妻真崎から学問や手習を教授されている。国頭は春満の有力な門人のひとりで、真崎は春満の姪に当たる。年譜によると国頭は、春満の『伊勢物語童子問』を写したとあり、『伊勢物語講義抄』という著作もある。真淵が国頭から、『伊勢物語』を学んでいたことは十分考えられよう。

真淵は延享三年（一七四六）、師春満の養子在満の後任として、徳川吉宗の次男宗武の興した田安徳川家に、和学御用として出仕する。真淵の出仕は、宝暦十年（一七六〇）、養子定雄にその職を譲るまでの十五年にわたり、その間、『万葉新採百首解』、『延喜式祝詞解』、『源氏物語新釈』といった研究を著している。『伊勢物語古意』もその間に著されている。

さて、『勢語七考』と『伊勢物語古意』との間には、研究史上、先後関係の問題がある。つまり、『勢語七考』を『伊勢物語古意』総論の礎稿とみるか、『伊勢物語古意』総論をまとめ直したものとみるかである。小山正氏は、「本書は伊勢物語古意の総論のみを集めたもの」[5]とするが、土岐善麿氏[6]や井上豊氏[7]は先行する『勢語七考』を補訂したものが、『伊勢物語古意』総論となったと見ている。近年では、田中まき氏が、田安徳川家出仕以前の元文元年（一七三六）

ごろ、「『妹背物語考』や『勢語七考』などの『伊勢物語』の総論に当たる著述を体系的にまとめていたか、まとめようとしていたものと考えられる」[8]と説いている。国会図書館本や竹柏園本の識語には、「享保元年（一七一六）冬」（国会図書館本、井上豊氏は寛保元年（一七四一）の誤りとする）、「延享元（一七四四）甲子初夏」（竹柏園本）とある。『伊勢物語古意』が宗武に献上されたものであることから考えると、やはり『勢語七考』のおおよそは、真淵の田安徳川家出仕以前に成ったものと見るのが、穏当であろう。

それでは、國學院本『勢語七考』も、真淵の田安徳川家出仕以前に成ったものと言えるのであろうか。田中氏は、『伊勢物語古意』の諸本を調査、検討し、従来、宗武献上本の草稿とされてきた鶴見大学図書館本が、真淵の門弟の一人、加藤千蔭筆本（宝暦九年（一七五九）写）よりも後に改稿された稿本であるとし、「『古意』は田安宗武への提出をもって完成したのではなく、宗武へ上進された後も、繰り返し改稿がなされていたと見られる」[9]と指摘する。田中氏の論は、國學院本『勢語七考』の素性を明らかにするのに注目すべき発言と言えよう。『伊勢物語古意』の署名は、「賀茂真淵著」（加藤千蔭筆本、神宮文庫本）、「加茂真淵記」（鶴見大学本、南葵文庫旧蔵本）とあり、前者から後者に改められたとされる。一方『勢語七考』の署名は、国会図書館本は「加茂真淵著」、竹柏園本は「賀茂真淵」とある。これに対して國學院本は、「賀茂真淵上」とある。先に見たように、『勢語七考』は、田安徳川家出仕以前の著作であるとされている。しかし、田中氏の見解を参照すると、『勢語七考』についても、田安徳川家出仕の後、改稿等がなされたことが推察される。すなわち國學院本は、真淵が田安徳川家に出仕した後、それまでの研究成果を踏まえて改稿し、宗武に献上したものと考えられる。

三　『勢語七考』の構成と本文

『勢語七考』には、國學院本出現以前に、紹介されていた伝本がある。既に示した国会図書館本と竹柏園本である。前者は、続群書類従刊行会から出された賀茂真淵全集所収『勢語七考』の底本に採用され、後者は弘文堂から刊行された賀茂真淵全集に収められている。國學院本を含めた三者は、真淵の『伊勢物語』研究における総論として著されたと見てよい。しかしながら三者は、内容においては大きな違いはないものの、構成や本文において各々異なった様相を見せている。本節では、三者の相違について実態を示したい。

（一）構成の異同

三本の構成は以下の通りである。各項目には見出しが付けられているが、冒頭の一項目には、見出しは付されていない。本稿では仮に「序」としておく。

【竹柏園本】

序、一　物語といふ事、二　いせの者かたりと名付けたる事、三　伊勢の御の書たるといふ事、四　なり平の自記ならんかといふ事、五　作れる時世の事、六　むかし男といへる事

【国会図書館本】

序、一　物語といふ事、二　いせの物かたりと名付たる事、三　伊勢の御の書たるといふ事、四　なり平の自記な

らんかといふ事、五　時世たかへる事、六　作れる時世の事、七　むかし男といへる事

【國學院本】

序、一　物語てふ事、二　いせ物かたりと名付たる事、三　伊勢の御のかきたるにあらさる説の事、四　業平の自記ならぬ事、五　時代のたかへる事、六　作れる時世の事、七　むかし男てふ事

ここに、田中氏が考察の対象として採りあげた加藤千蔭筆本と鶴見大学本、および宮内庁書陵部本（続群書類従完成会本賀茂真淵全集）の『伊勢物語古意』総論の見出しを掲げてみる。

【千蔭筆本】（すへ論ふこと八つ）

一　（見出しなし）、二　伊勢物語と名つけたるは、三　業平朝臣のみつからの記ならぬ、四　伊勢の御の書たらぬは、五　時世の違へるは、六　作れる時世は、七　（見出しなし）、七　むかし男てふは

【鶴見大学本】（すへ論ふこと八つ）

一　ものがたりは、二　いせ物かたりとなづけたるは、三　業平朝臣のみづからの記たらぬは、四　伊勢の御の書たらぬは　五　時世のたかへるは　六　つくれる時代は　七　古の本今の本また作れる人は　八　むかし男てふは

【書陵部本】（すべ論ふ事八つ）

一　物かたりは　二　伊勢物語となづけたるは　三　業平朝臣の自らの記ならぬは　四　伊勢の御の書たらぬは

五　時世のたがへるは　六　つくれる時代は　七　古しへの本今の本又作者は　八　むかし男てふは

三本の内、竹柏園本は、六項目からなる。見出し上、他の二本に存する「時世たがへる事」の一項を欠くが、内容上、当該箇所は「四　なり平の自記ならんかといふ事」の後半に含まれている。次に見出しの文言をみると、竹柏園本と国会図書館本は同じ文言であるのに対して、國學院本は「七　作れる時世の事」以外の項目について、微細なものではあるが、異なった文言を持つ。一方、『伊勢物語古意』総論の構成に目を転じると、『勢語七考』の内、「作れる時世の事」の後半に位置する『真名本伊勢物語』についての記事が、「古の本今の本また作れる人は」などの見出しによって、独立した項目となっている。

（二）本文の異同

次に内容上の異同を、「物語といふ事」（國學院本「物語てふ事」）を例に検討してみたい。まず、それぞれの本文を掲げる。

【竹柏園本】

枕草子源氏物語更級の日記なとにあげたる物語さま〳〵あれとも今の世にふるく傳はれるはたけとりいせうつほおちくぼすみよし源氏榮花その外いくばくも侍らすそれみなまことのふみとはつとめてこと様に作りたる所のたくみを一興としたるためりそれか中に榮花のみその世のことをしるせれはかへりてまがことのひが耳聞しことくいはむとてむな事と同しく物語と名付たるは時をさすのはゞかりあれはなるべし且此伊勢の物かたりをも實のことくおも

ひける人はやく有しより　すへらきのみことのりしてえらませたまふ實録かつは古今後撰の集をさへ此物かたりによりてあやまれる事侍るそかし物かたりと名付たるは實録録にてあらぬ人の口にあることをそらごとまがことをはらはす書あつめたりといふ義にて實はみつから作者の偽りて作れること也ゆめ〳〵まことゞおもふへからす猶次下の條々をくはしくせは物かたりなる事明らかなるへし

【国会図書館本】

源氏物語・枕草子・更級日記なとにあけたる物語の名さま〳〵なれとも、今の世に傳はれるハ、竹とり・いせ・やまと・うつほ・おちくほ・すみよし・源氏・榮花その外かれこれのみ也、それミな実録とハつとめてこと様にして作りなしたることを一興としたる也、それか中に、榮花のミその御世の事をしるせれハ、かへりてまことならぬひが耳聞しことくいはんとて、むな事と同しく物かたりと名付けたるハ、時をさすのはゝかりあれハなるへし、且此伊勢の物語をも実録也とおもへる人はやくありしより、すへらきの勅して撰はせ給ふ実録、かつは古今・後撰の集をたに、此物語によりて誤れる事侍るそかし、夫物語と名付けたるハ、実録にハあらて、よの人の口にあることを、そらこと・まがことをきらハす書集めたりといふ義にて、実ハミつから作りて皆いつはりこと也、たゝ俗にいふむかしばなしと心得へきのミ、猶つき下の條〳〵をくハしくとき侍るをまちて、物かたりの物かたりなる心をしるへし、

【國學院本】

古きふミどもに挙たる物語ふミの中に今に伝わる竹とりいせうつほ落くほ源氏なとハミな作りなせる物也栄花今昔

なとの類ハ物かたりてふ名ハかれとも実事もハた侍りさて右の作り物かたりの中におのつから人の心までよきも侍るを此伊勢物語ハ教なとの心しらびハなくてたゞ一興として作れるのミ也たゞ詞なんよろしく侍れハ古きふミ出人の料にハハた此類にして上なくぞ侍るさてむかしよりいひかたり伝へて実録には侍らねハ物がたりとハいふを序にいひし如く実録をはよくも心まで□にからめられたる人ハ此伊勢物かたりを中〳〵に強て実録のやうにいひなせる人も侍りよりて実録もうたかふに成にやいとあさましきわさなりかへす〳〵も物語といふハ実偽りをとハずよの人の口づからいふなるむかしのことをなむ出立せりといふ意にてまことにミつから作りて皆いつはり事也俗にいふむかしはなしとしらバたがへる事も違べきをなどかおもはざらん猶その條〳〵にくハしく解侍るを待ちて物かたりの物かたりなるを知へし

まず、「まことのふみとはつとめてこと様に作りたる所のたくみを一興としたる」（竹柏園本）、「実録とはつとめてこと様にして作りなしたる」（国会図書館本）、「ミな作りなせる物」（國學院本）とあるように、物語の内容はあくまで虚構であるという主張は三本とも共通する。その例示として、『源氏物語』や『竹取物語』といった平安朝物語の題名が列挙されるが、竹柏園本と国会図書館本は、『栄花物語』について、実録性を強調しつつ、あえて物語と名のらせることによって、時世を書くことへの憚りを韜晦する機能があることを指摘している。一方、國學院本は『栄花物語』とともに『今昔物語集』を並べることに特徴があり、「実事もハた侍り」と物語内容に事実があることを指摘するに止めている。『伊勢物語』については、三本共通して、早い時期からこの作品が実録性を有していたという主張があったことを指摘している。これは『伊勢物語』が『在五中将日記』と別称され、在原業平自身が、自らのことを書いたとされる認識が古くからあったことを念頭に置いた記述であろう。その上で真淵は、点線を付した条りで述べるように、『伊勢物語』が「物語」と名づけられているのは、虚実を問わず世人の語る伝承を筆録したという意であり、

実際には、みな作者の創作であると結論し、以下、具体的に詳述することを述べている。

むすび

本稿は、國學院大學図書館の所蔵する賀茂真淵自筆本『勢語七考』について、解題と翻字に加え、若干の考察を行ったものである。國學院本は、真淵が初代当主宗武に仕えた田安徳川家に伝来した点に、高い資料性が認められる。また、末尾にある「賀茂真淵上」の一文は、年紀を欠くものの、真淵が宗武の下に出仕した後に書写したものと考えられる。これは、國學院本以前に存在が知られていた国会図書館本および竹柏園本が、出仕以前に著され、『伊勢物語古意』総論の基となったとされるのとは異なった位置づけができると思われる。三伝本間の本文比較については、一項目のみに留まったが、國學院本の本文は、他の二本とはやや隔たる点があると思量された。『伊勢物語古意』総論と國學院本『勢語七考』との関係については、今後、考察を深めていく必要があるだろう。

註

(1)　笹川勲「國學院大學図書館等蔵『伊勢物語』関係資料書誌・略解題」(『國學院大學校史・学術資産研究』第六号　平成二六年二月)。

(2)　松方冬子氏「田安家蔵書の伝存について」参照。(大学共同利用機関法人　人間文化研究機構国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究　田安徳川家伝来古典籍』所収　青裳堂書店　平成十八年)。なお、松方氏は旧姓徳川氏。田安徳川家の出身である。

(3)　大津有一氏『伊勢物語古註釈の研究　増補版』(八木書店　昭和六一年)。

（4）主として、三枝康高氏『賀茂真淵』（吉川弘文館　昭和五九年　人物叢書新装版）を参照した。
（5）小山正氏『賀茂真淵伝』（春秋社　昭和十一年）。
（6）土岐善麿氏『田安宗武』第二冊（日本評論社　昭和十八年）。
（7）井上豊氏『賀茂真淵の業績と門流』（風間書房　昭和四一年）。
（8）田中まき氏「解題」（片桐洋一氏編『伊勢物語古意』伊勢物語古注釈書コレクション第五巻　和泉書院　平成十八年）。
（9）田中まき氏　註（8）前掲論。

【参考文献】

小山正氏『賀茂真淵伝』春秋社　昭和十一年
土岐善麿氏『田安宗武』第二冊　日本評論社　昭和十八年
井上豊氏『賀茂真淵の業績と門流』風間書房　昭和四一年
三枝康高氏『賀茂真淵』吉川弘文館　昭和五九年（人物叢書新装版）
大津有一氏『伊勢物語古註釈の研究　増補版』八木書店　昭和六一年
田中まき氏「解題」（片桐洋一氏編『伊勢物語古意』伊勢物語古注釈書コレクション第五巻　和泉書院　平成十八年）
松方冬子氏「田安家蔵書の伝存について」（大学共同利用機関法人　人間文化研究機構国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究　田安徳川家伝来古典籍』青裳堂書店　平成十八年）

【翻字】國學院大學図書館蔵賀茂真淵自筆本『勢語七考』

【凡例】

一　一行ごとの字数および一紙ごとの行数は原態を残していない。改行を示す記号等も付さない。
一　濁点は施したが、句読点は施していない。
一　ニ、ハ、ミの三字については、字母の原態を残した。
一　字体は通行の新字体としたが、「哥」は原態を残した。
一　判読できなかった箇所は、□を置いた。
一　文中の小文字は〈　〉で包んだ。

いにしへハ大宮にもをし国にも学びのつかさをおかれて正しき法を教へ実録をも撰ミ集めさせ給へれハ空行雲のあとなし事ハ星の如くまじハれども人のわきまへ知てまどふものなんなかるべきさて時よのうつろひぬれバ人の心あだなるぞ色々なりゆきて山橘の実のミなる物ハくすしくあきたけれバ色ごのミのあたりにハとることなく山ぶきの花のミなる物ハなまめきたわミたれどまめなる人の手にも摘べくなんなれりけるかゝる時より世の中にむかし物かたりてふミや出きにけん抑それがさまハことばの花ミやびかに心の露あためきてもはら時につけたる人の心をたのしましめんことをつとめたるぞ多き然ハあれとも時にハことのまことといつはりてふことをわいためしれゝバかりそめのわらへぐさになして分まどふ人やあらざりけんあはれ今よりも五もゝむもゝとせばかりのむかしへすべらぎのミい

はほひおとろへさせ給ひてきミたちの心〳〵によをとりなせるよりむかしの後たゝじと文に給てあるとある人わた中にかいを失ひありそにつなでたえさらん如く行方もしらずもてさわぎつゝむかし立かへるべきたよりなくてかのまことのふミなとハよくも見ねバうたがひをなし此あだなる物のめにやすきをしるべとせる事にしも成にたるハけに物かたりてふふミのついへになんありけらしされともふミを書哥をよまんにハふるきことばによらされハミやびかならずかれひたぶるにふることをたふとミ詞の花をとるへきよしハ定いへの卿もしるけれにけりいてや其比ハ哥よむ事をのミわざとしてふるきふミミし人しあらねハことにつきてハおのが心の筋とり〴〵にみだれてかた糸のより〳〵にあげつらふ事蜘のはた手なる物故おり立て定めんことかたけれハたゞ打はへて哥よまん人の助となさんとの事也けりしかハあれと花のほしくハ種をしもとれといふらん諺のごとく山たち花の実あるふミを見あきらめて後山ふきの花のミなる物がたり也けりといふ事を知得ん人ハ此まことならぬ夢がたりも中くにまたなき哥枕となんなりぬべかりけるたゞうはべの花のミをつまばいか成色にかうつろひ行んことの本をたてゝこそかく侍るべきなれいま此　御代久しく治りてよろつの道もやゝむかしへにかへるをりしもつかさ位有にあたりの程ハおのが聞知へくもあらずここにかしこにはひわたりて哥ものかたりなとわたなる人ハ猶あたちが原心の鬼しこもれハ難波江のあしとおもへる事をもかへりてひめ事也といひすゝむるもありぬへしたまぼこのたま〳〵に学びの道に出たらん人をおえまどハさぐらんことをこそおもふべけれ

一　物語てふ事

古きふミどもに挙たる物語ふミの中に今に伝わる竹とりいせうつほ落くほ源氏なとハミな作りなせる物也栄花今昔なとの類ハ物かたりてふ名ハかれとも実事もハた侍りさて右の作り物かたりの中におのつから人の心

まてよきも侍るを此伊勢物語ハ教なとの心しらびハなくてたゞ一興として作れるのミ也たゞ詞なんよろしく侍れハ古きふミ出人の料にハハた此類にして上なくぞ侍るさてむかしよりいひかたり伝へて実録には侍らねハ物がたりとハいふを序にいひし如く実録をはよくも心まで哥にからめられたる人ハ此伊勢物かたりを中〳〵に強て実録のやうにいひなせる人も侍りよりて実録もうたかふに成にやいとあさましきわさなりかへす〳〵も物語といふハ実偽りをとハずよの人の口づからいふなるむかしのことをなむ出立せりといふ意にてまことにミつから作りて皆いつはり事也俗にいふむかしはなしとしらバたがへる事も違べきをなどかおもはざらん猶その條〳〵にくハしく解侍るを待ちて物かたりの物かたりなるを知へし

一　いせ物かたりと名付たる事

末の世にいたりてとり〴〵にあらそへどもうべなる説を聞侍らずひとり清輔朝臣の袋草子に有二密事一之故為下搆ル二僻事一之由上號二伊勢物語ト一諺ニ伊勢ハ僻ト云故也とかゝれたるぞふるき時よりいひ侍へし事なるべき凡此物語の様男女のなからひ義理にたかひたるぞ多きそれハいつれの物語にもあるをそにハ哥を挙たるも上句を万葉にとり下句を古今にとり或ハ時世いとことなる人の哥をもて贈答になし或ハ古哥の一言一句をかへて心をことにし或ハ古哥をそのまゝ挙たるハはし書を書かへて意をことにし或ハ作者をかへたり或ハ世をも官位をもたかへて二百余條の中に大かた実録に違ハさるハ二つ三つや侍らんそれハかの僻事を称かの名か事知へし且いかなる所にて伊勢にひがことてふことのあるにや堀河院後度百首池てふ題にて藤原忠房朝臣

伊勢ならひがことぞともおもハましやまとなるてふミまさかの池　此哥右の御時池の題によまれけるをおもへハこは此の事にハあらで古き諺にミえたり又其後にも夫木抄に

西行

いせ人ハひかことしけりさゝぐりのさしにハならて柴にこそなれまた鴨長明

伊勢人はひかことしけり津島より甲斐川ゆけハ和泉のゝ原などもよめりこれらを証とすへし〈真渕〉今案るに後ていはじかの斎宮のおかされ給へること実ならハ事出来て後京わらべのわざうたにいせ人はひか事しけりとうたひやしけん又いせや日向の物かたりといふはいせ人日向人一所に寝たるに魂のいり代りていせ人ハ日向に行日向人ハいせへ行たりといふ物かたりの侍るがふるき事にていせにひがてふことをいふか等ハよし話たりとも右の三の哥にてふるきことわざしらるれハよく此物かたりの作りさまにかなひて侍りミしを奥義ありなといふほどのおろか人ハさることを嫌ひてとらぬ成へし

一　伊勢の御のかきたるにあらざる説の事

古きふミに挙たる成をミれハ他の物かたりと同じく是も一興とせるのミなりしを堀河白河の御時などははやくむかしの事を忘たれハ俄にむかしの事をも明めんとするに哥のミよむ人なといかて事の心をしるへき其後定家卿のかゝれしなといふも此比只哥よまん便りのミ大かたに見えされたれハふかくに考られす仍て一時のうたかせひを挙て伊勢のかゝずバいかで伊勢物語といはんなど書て猶不穏侍れハ古人強不可レ尋ニ其作者ヲ一唯可レ翫二詞花言葉ヲ一とハいはれけんさるより後の人此説を助けんとて云々七條后へ伊勢が書て奉る時業平の自記のはしに筆をそへて物がたりに作りたる也と〈真淵〉今案るに七條后温子ハ昭宣公の御女也二條后高子ハ同公の御妹にて七條后の御をは也伊勢の御ハ初め七條后の女房なるに其御里かたの不義密事を書あらハして奉るへきやハ又皇后の懲悪の御為也と此説いかにすくふとも得べからずいといにしへ人のうへかゝハらぬことこそあらめ御をばの不義といひひとに高子の皇后猶おハしますものをさらぬよそ人の事すらまのあたりにいふへきかハ況んや先帝の后の自の本主にもあ

るをその密事を女の口さかなくふミにさへしるして奉らんやハ古き事ハ心ゆるくおもふ作にさることをもいふ也けり其時におもひかへして□をハ定むへき也又竹とりおちくほなとなり初て皆そのふミの中にある人を挙て名とせるを作者の名を書て伊勢物かたりといはん事も例なし又伊勢の御の家集の発端の詞に似たるといふ説もいとはとしたる事也凡女の出たる物ハさる事多しまた物かたりてふものもいつとさゝぬなど大かた作たり作ぬるを心ていはは物かたり皆伊勢か作せんやハ

一　業平の自記ならぬ事

定家卿云心中の密事其人ならて知へからす又卑下の詞も自記ならすハあるへからぬやうに書れたり今案るに之ハいと誤られたり凡文を作る人筆かきりなき物なれは其人のおもはんよりもあらんよりもふかき心をもよく書りあはれなる事をハ聞人の涙をさへ落すへく書なしなとするこそ物かき物いふ人の妙なるわざとハすめれいでふミ作らんとする人その人にあらずとてふかき事をもいはず卑下をもかゝずハいかでをかしからんたゞ実録とおもひ誤られしよりの事なり物かたりてふ説のそひたるを忘れられし物也

一　時代のたかへる事

芹川行幸なとの時代の事をかろ〳〵論する人の侍るハあかしの地のいのこめきたる事にて侍り第一條より以下多く時世をたがへて書たり先一つをいはし第二條に此京ハ人の家いまだ定らざる時とあるハ西京ハ作りて東ノ京ハまだ作りはてぬ時と也桓武天皇延暦三年に都を長岡にうつされ同十三年に今の京に遷されたるに其御時の御いきほひにてハ五六年の内にハ東の京も成ぬべし業平朝臣にハ陽成天皇元慶四年に五十六歳にて卒せられし事三代実録にミゆそれより逆に数れハ都うつりハ業平生れさる先いとはるかなる所也凡十四五歳以上にてこそかゝる忍びごとも侍るべければ彼此を合す

れハ四十年余の違侍り其をハいかに心得るにや此時の哥古今集にあるにハかゝるはし書ハ侍らねハ違なし此物かたりにかく時世を書まきらハして興をなせる物也此次〳〵よく事実を摂てさてこれを見ん人ハわざと時代をかへて書たるを知へし或説に此條ハ作りこと也此條ハ実に自記也といふふミなよく物かたりの心を得ぬ人のさた也其自記也とおもふ條をもよく摂てミるに実ならぬ多し其條くハしくいふを待へし

一　作れる時世の事

釈顕昭なとハ古今集より前なる物とおもひて古今秘注にそのよし書たりよく物語をしらぬ説也且業平朝臣の日記として書物に初冠後に終焉一期の事を書りといへり今案るにいか成人かおのか事を物語として臨終の病床までに書はつるものあらんやハ又詠哥大概抄に古今集次てちれしといかにそや古今六帖の哥もてミれハ在原元方紀友則壬生忠岑等の哥も此内に見え貫之哥を模せしとミゆる哥も侍れハ後撰集より後に作れるなるへし橘直幹ハ拾遺集の作者なるに此内に其名見えたり或説のはし書にそのたゝもとが人のむすめ云々と有を作てこゝに似つきたれバ業平の書を出て贈りし也と助くれども古今集にも詞書に作者の名あれハ哥に名ハかゝぬ所もあり拾遺集には皆さる例なるをたに覚えざる也けりさて右の人〳〵の哥をは藤原の時にとりて物語とせんやハ既に融公の名を業平のとるへからすと定家卿疑ハれし類也又順朝臣を詞に出せしは余りに□しき也仍ておもふにも其ハ後人の裏書なとせるを本文とおもひて混せしなるへしも本裏書にあるをおもてにもして書てさても後に同しく本文也とおもひまとへる数多くミゆ猶其條之にいふへし又是に古本侍り真字にて書たれハ俗にも今の本にハ真字伊勢物語と書たり古本にハ真字二字ハあらすそれハ詞とゝのひてよし普通のかな書の本ハ誤字錯乱いと多し且其真字本にハ六條宮御撰と侍り之ハ村上天皇の皇子具平親王を申せハ時世もよくかなひ思此物かたりハ男の意なれハかた〳〵さまて

侍らめ但御撰と書たれハ後人さ伝へて御名をハ書しなるへし且凡物語ふミに作者の名をしるさず女の書てハうけばりて名を書べからぬ事勿論也男の書たるもかくたはれしること書て丈夫の名を□□べからねバいづれも御名ハしれがたきもとより也

一　むかし男てふ事

むかしと暫よミ切て男有けりとよむへしといふ説ハよしむかし一人の男侍りててふ義なれハ也さて是ハ凡業平をさす也但此朝臣ハ三代実録に體貌閑麗放縦不拘略無才学能和歌とあれハ放縦の人とハ聞ゆれと物語の如くならハ令律専ら行はれし時にて罪にあたるへきをそにいふほとハあらさりし成へしいと若きほとにてハ官位昇こともすミやかなりし也されはむかしの男として名をハいはす且官位年月哥の詞なとをも皆しはしたかへてたま〳〵在五中将なといふ説を出ゆしてそれとほの□へくしなしたり右に物かたりの物かたりなるを心得ハ業平ならぬ業平也といふ事を的らむへし作に後の人此物語をミな実事也とおもひて皆業平の哥也とおもひて集にもとれるハ事の心をも哥をもよく□□ぬるにや業平の哥ハ此中にもいとことにして一人の風体なるをやその外ハ他人の哥又ハ物語作者のよめる中多くミえたりさて右のことく虚談なから詞書はいとよく侍なり源氏物かたりなとハかゝれたることなし此古文の看畧の説ハよく名ハあしかるへし哥ハ古今集なとにてミるへし是ハことの心をかへたれハいとわろき事多したま〳〵こそいとよきハミゆれハ後人の説といふこと也けり

賀茂真淵上